

第1回「山を活かすべ」～山の現状と未来への可能性 記録

- 主催 NPO 法人会津みしま自然エネルギー研究会
- 共催 一般社団法人、会津自然エネルギー機構
- 後援 三島町、奥会津五町村活性化協議会、会津若松地方森林組合
- 場 所：三島町交流センター 山びこ
- 日 時：平成 27 年 1 2 月 1 1 日（金）13：30～16：35

1. 日程

全体司会：二瓶 厚

- | | | |
|-------------------------------|-----------------------------------|-------|
| (1) 開会 | | 13：30 |
| (2) 主催者挨拶 | 理事長 岩渕 良太 | 13：31 |
| (3) 山の現状報告 | 会津若松地方森林組合参事 渡部 宗揮 氏 | 13：35 |
| (4) 三島町町長挨拶 | 矢澤源成 氏 | 14：20 |
| (5) 講 演 「森に暖められるまちづくり」 | | 14：30 |
| | 講師：東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科教授 三浦 秀一 氏 | |
| (6) 語り場（「山の未来への可能性」をテーマに話し合い） | | 15：35 |
| | 司会：五十嵐 乃里枝 | |
| (7) 閉会 | | 16：35 |

2. 記録

- (1) 山の現状報告（要旨）
後記
- (2) 講演
別紙講演資料参照
- (3) 語り場意見（要旨）
 - 都市（住民）との連携が必要だ。
 - 災害防止の観点から山の手入れは急ぐべきだ。
 - 地域で金（資金）を回す仕組みが必要だ。それには、組織・動かす人・情報発信・感性が重要になる。
 - 「地方創生」とは、すなわち地域創生だ。「足元の泉を掘る」努力をしたい。
 - 具体的に動き出すためのルール作りが必要だ。
 - （土地）境界不明の問題は、その地域を一括管理することで乗り越えることが出来るのではないか。
 - 昔の薪炭がそうであったように、地域の木材を地域内で廻すようにしたい。
 - 将来への見通しを持って現在の困難を乗り越えようではないか。
 - 公共施設から木質バイオマス利用を推進してほしい。それを町づくりの柱のひとつにしてほしい。
 - 国等の補助も生かせる仕組みを作ろう。
 - 山の整備は絶対必要だ。自然災害の原因になる。
 - 木質バイオマス利用により新たな雇用も生まれるのではないか。
 - 地籍調査は国の補助も得てやるべきだ。
 - 子孫のために、今やらなければならないことがある。
 - 初期投資には行政の支援が必要だ。
 - 木質バイオマスエネルギー利用には一般向けの情報発信が必要で、そのことで需要も生まれる。建築業者さえ知らない。

3. 総括

山の現状を把握し、手入れと共に材の活用を図るべく企画立案した。単なる講演会として終るのではなく、具体的な前進のための手がかりを得ることができる構成とした。

山の現状報告と講演、意見交換会の3部構成はそれぞれに意味のある中身となり、参加者には今後の歩みを想起させるものとなった。

熱い思いを持った多くの方々の参加を得て「第1回山をいかすべ」を無事終了することが出来た。会津若松地方森林組合参事 渡部宗揮氏からの会津の山の現状報告、東北芸術工科大学教授 三浦秀一先生の木質バイオマスエネルギー利用に関する講義、三島町長 矢澤源成氏及び金山町長 長谷川氏からの行政としての方針を伺った上で、参加者相互の対話と意見交換等を行った。

この中で、実に多くのことが明らかになり課題がクローズアップされた。例えば、山の地籍未調査・路網整備不足・木材価格の下落と需要低迷・過疎高齢化に伴う不在地主の増加・人材育成の遅れ等々、山の整備には難問が山積している。

しかし、子孫・地域のためには、今行動に移さなければならないこと、私達の一人ひとりが足を踏み出さなければならないことが参加者の総意となった。当面の具体的な行動として、地域内の木材を地域内の燃料として利用する事を目標にすることができる。主に間伐材を熱源の燃料として、その調達から利用までの流れを地域内に作ることである。かつての薪や炭利用の時代に戻るのではない。現代化された技術による地域のための地域内循環型エネルギー戦略である。このことによって、資金の地域内循環が起こり、地域が元気になり雇用も生まれることが期待できる。そのための基本計画を策定し、組織を作り、実行に移すための取り組みが必要となる。

4. 今後の方向

研究会として、総括にあげた「基本計画」、「組織」、「実行計画」素案を作成し、しかるべき時期に「第2回山をいかすべ」を実施する。その際、研究会員は勿論のこと、行政や地域の有志にも参加を募り、新たな実行組織を作ることが望ましい。
